

山梨県における縄文時代中期終末の土器様相

——曾利式編年と加曾利E式編年の対比から——

武川村教育委員会 平山 恵一

はじめに

縄文時代中期後葉の山梨県内は曾利式土器の文化圏として以前から知られており、曾利式土器に関する研究も非常に盛んである。しかしそのような曾利式土器も縄文時代中期終末になると急激に減少し、関東平野に分布する加曾利E式土器が山梨県内にも出土するようになる。その背景には、曾利式土器を放棄し加曾利E式土器を採用する理由となる何らかの社会的な変動があったことをうかがい知ることができる。そのことは土器型式に限ったことでなく、様々な角度からの研究により、明らかにされつつある。しかしそれと同時に、未だ当時の社会を解明するには残された問題点も多い。これは、土器研究においても言えることである。曾利式の研究は進んでいるが、県内出土の加曾利E式土器については曾利式土器の終焉問題⁽¹⁾について対比されるものの、型式自体の研究は、加曾利E式土器が山梨県内において客体的な型式にとらわれがちなためか、活発であるとは言えないだろう。しかし、県内の加曾利E式土器の出土事例は確実に増加し、縄文時代中期終末の様相を知るうえで非常に重要な位置を占める土器型式であることも事実である。ここではそのような位置付けにある加曾利E式の土器を、山梨県出土資料を対象にして加曾利E式土器様相を検討し、また、曾利式土器との並行関係も含めて縄文中期終末の土器様相を見ていきたい。

研究史

曾利式土器編年の研究は、藤森栄一氏の井戸尻編年をはじめ現在に至るまで、曾利I式～V式の変遷に修正・変更が加えられ、曾利式編年はより正確で緻密なものになってきている。その編年研究のなかには、関東地方に分布する加曾利E式との関係について述べられているものもあり、加曾利E式土器は、曾利式土器研究を進めるにあたり重要な位置を占める型式となっている。なかでも曾利式終末期においては、関東地方に分布の中心をもつ加曾利E式が山梨県を中心とする曾利式土器圏内にも広く出土するようになり、両型式の並行関係・終焉問題が論じられるようになった。本来であれば諸氏の曾利式の編年研究及び、各期の加曾利E式土器との関係について研究史をまとめるべきであるが、紙面の都合もあるため主に近年の論文に限定して、曾利式終末期土器様相及び加曾利E式との並行関係、終焉問題について触れられている論稿についてまとめていきたい。

末木健は『縄文文化の研究4』の曾利V式のなかで3細分の可能性を指摘し、その要素として口縁部文様帯、胴部懸垂文の描出法、胴部のⅡ区画をあげている。曾利式と加曾利E式の関係については、曾利式文化が完全に加曾利E式文化に吸収されてしまったかのようにみえるが、両型式の終焉は同時期としている。終焉問題に関しての姿勢は『金の尾遺跡』においても変えていない（末木1981、1987）。

米田明訓は『柳坪遺跡』で、曾利式を八ヶ岳南麓の資料をもとに9細分している。その中のⅦ～Ⅸ段階が曾利V式に比定されると思われる。そのなかでⅧ段階に口縁部に沈線による弧線文が施される土器群、口唇部直下に1本の沈線文をめぐらし、懸垂文区画がなされていない土器群を位置付け、Ⅸ段階に金の尾遺跡特殊2号土坑の土器を位置付けている。それに伴う加曾利E式の土器はⅦ段階に口縁部文様帯が消失するもの、Ⅷ段階には胴部に渦巻文あるいは曲線のモチーフを表現するもの、Ⅸ段階には懸垂文間の幅広い無文帯を有する土器群を位置付けている（米田1986）。

小野正文は釈迦堂遺跡の曾利式土器を検討するに従い、曾利式の編年には合致しないものの多いことに気づかされたとし、従来の曾利式編年のⅠ・Ⅱ式を曾利古式、Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ式を新式、それに続く段階を曾利新新式と大別し、曾利古式を3細分、曾利新式を4細分している。大体曾利新4式が曾利Ⅴ式に比定され、加曾利Ⅴ式土器との並行関係については、曾利新3式に加曾利Ⅴ3式、曾利新4式には、加曾利Ⅴ3式のワラビ手状の沈線を施す土器群が伴出し、曾利新新式においては加曾利Ⅴ4式に席卷されてしまっている(小野1987)。

山形真理子は、釈迦堂遺跡の報告(山梨県教育委員会1987)同様、曾利式を古・新式と2式に大別し、それら曾利古・新式をそれぞれ細別しているが、曾利新式を3細別するなどの細別内容に相違が認められる。加曾利Ⅴ式との関係については、曾利新2式に加曾利Ⅴ3式の口縁部文様帯と胴部に縦の磨消縄文帯が発達する土器群が並行し、曾利新3式には、加曾利Ⅴ3式の口縁部文様帯が抜け胴部上半の大ぶりの波状沈線と下半の逆U字沈線が組み合わされた磨消縄文と蕨手縄文が入る土器群が並行する。そして加曾利Ⅴ4式期には、曾利式は終焉するという立場に立ち、さらに金の尾遺跡の特殊2号土坑の土器を曾利式の系統を残す土器として曾利新3式からはずし、それに伴う加曾利Ⅴ式を金の尾段階、曾利式土器を伴わず、加曾利Ⅴ式土器のみが出土する段階を一の沢段階と、2段階に区別している。

佐野隆は山形編年を支持すると同時に、曾利新3式内において更なる細分の可能性を口縁部文様から見出し、曾利新3式をさらに古・中・新段階の3段階に細分した。この細分案により簡略化の中でしか語られず、変遷過程のとらえにくい曾利新3式を時間的な変遷の中でとらえている。また曾利新3式新段階に続く段階は金の尾段階の土器を指し、曾利新4式としている。加曾利Ⅴ式との関係については、曾利新3式古段階に加曾利Ⅴ3式、曾利新3式中段階に口縁部文様帯をもつものは存在せず、胴上半部いっばいに弧状沈線を描くもの、胴上半部に渦巻状のモチーフを描く土器群が並行し、曾利新3式新段階には対向U字文を施文する加曾利Ⅴ式が並行するとしている(佐野1997)。

榎原功一氏は曾利式Ⅰ～Ⅴ大別を基本とし、それらの細分という形でa～cの2～3細分として地域性を考慮した上で土器の類型を抽出し、類型別変遷をそれぞれ想定している。その中で曾利Ⅴ式をa～c期に細分し、Ⅴc期に、いわゆる金の尾段階の構成の崩れた曾利式土器とそれに伴出した加曾利Ⅴ式土器を、また、一の沢1号住居、郷蔵地遺跡1号住居の出土遺物も、曾利Ⅴc期にそれぞれ位置付けている。加曾利Ⅴ式との並行関係については、多摩・武蔵野編年に対比させ、曾利Ⅴa・Ⅴb・Ⅴc期に、それぞれ多摩・武蔵野編年⁽²⁾の12b・13a・13b期が並行するとしている(榎原1999)。

金の尾遺跡の特殊2号土坑の出土遺物の扱い方が、曾利式終末期の土器様相及び加曾利Ⅴ式との関係を考えるうえで非常に重要な位置を示す。しかし金の尾遺跡特殊2号土坑の編年的な位置付けにおいては、統一した見解が見られない。それは曾利式最終末期になると加曾利Ⅴ式が卓越してしまい、曾利式の土器の出土事例はほとんど見られなくなるということが要因としてあげられるであろう。加曾利Ⅴ式との終焉問題については、金の尾遺跡特殊2号土坑内の曾利式終末の土器と加曾利Ⅴ4式の土器が伴出していることから、両型式の終焉は同時期とするという立場と、加曾利Ⅴ4式が単独で出土する郷蔵地遺跡1号住居、一の沢遺跡1号住居の事例から、県内において加曾利Ⅴ式より先に曾利式が終焉するという立場があり、終焉問題においても解決したとは言えないだろう。加曾利Ⅴ式との並行関係については、県内における曾利式土器、加曾利Ⅴ式土器の遺構単位による伴出資料が少ないためなどの理由から、あまり活発に行われていないのが現状のようである。しかし県内の加曾利Ⅴ式土器の出土事例は増加しており、また中谷遺跡、大月遺跡などの曾利式や、加曾利Ⅴ式などの縄文時代中期終末期の良好な資料が数多く出土した今、加曾利Ⅴ式との関係を軽視

する事ができない状況にまできていると思われる。ここでは曾利式土器と加曾利E式土器を、出土した遺構単位による一括資料を基に両型式の並行関係を求め、県内出土の加曾利E式土器の時期的位置付けを行いたい。

分析にあたり

以降、山梨県内出土の遺構単位による一括資料を、曾利式土器は佐野編年、加曾利E式土器は多摩・武蔵野編年に、それぞれ編年的な位置付けを求め、その後に両編年の並行関係を見ていきたい。佐野は先述したとおり、山形編年の曾利新3式を口縁部の文様からさらに古・中・新段階に3細分し、簡略化の過程の中で語られる曾利式終末の土器群から時間的変遷を追っている⁽³⁾。当該期の加曾利E式との並行関係については、当時報告されている出土資料の少なさのせいもあって不明瞭さを残しているが、筆者も賛同する点が多い。

加曾利E式土器は従来から様々な研究が行われ、研究者の視点ごとの様々な編年が組まれている。しかしその結果、加曾利E式土器の時期区分に関しては、今現在においても研究者間に混乱した様相を呈しているようである。特に加曾利E 4 (IV) 式においては、加曾利E 4 式または加曾利E IV 式と表記が異なるだけで型式の成立時期が異なるなど、非常に扱いにくい型式となっている。このような状況下において加曾利E式土器を扱うことに対して躊躇を覚えるが、今回は近隣の地域である多摩丘陵、武蔵野台地出土の加曾利E式土器を対象に作成された、多摩・武蔵野編年に一度対比させ、山梨県出土の加曾利E式土器の形式学的位置付けを行いたい。そのような両型式の編年的位置付けを行った後で、山梨県内における両型式の並行関係を見ていきたい。

出土資料の検討

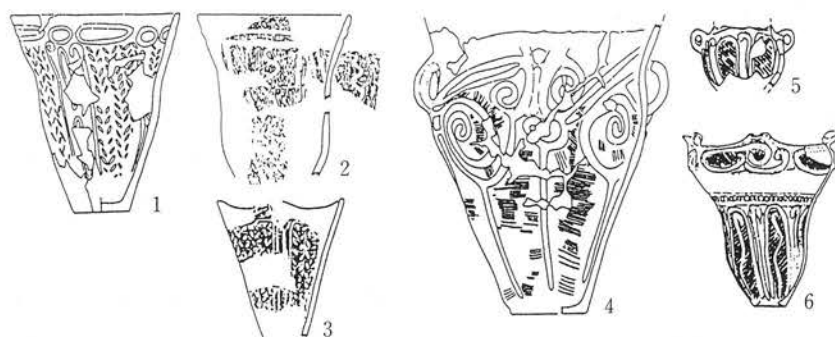
ここでは曾利式土器と加曾利E式土器が遺構単位で相伴関係にある曾利式土器について見ていき、佐野編年における位置付けを行いたい。

釈迦堂遺跡 S I IV 区 S B 78 (第1図)

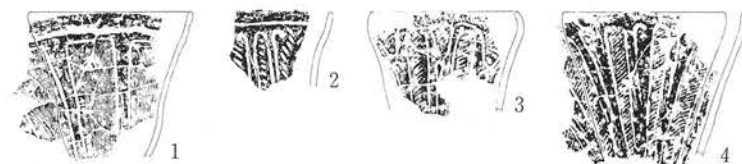
1は胴中位に緩やかな括れをもち、口縁部が平縁を呈す土器である。口縁部に、円形文と楕円文を交互に配置させている。地文にはハの字文が密に施されている。懸垂文には楕円文が縦に2段施され、両脇に蕨手文が施される。

2は口縁部が平縁を呈し、胴部に緩い括れをもつ。

II字状の区画内に条線地文と蛇行沈線文を施している。3は低部から直線的に立ち上がる器形で、口縁は波状を呈す。口縁部が欠損しているため口縁部文様は正確にはわか



第1図 釈迦堂遺跡SI IV SB78 (1/12)



第2図 牛石遺跡 1号住居址 (1/12)

らない。懸垂文を有し、地文はハの字文が密に施されている。4はX字状把手付大型深鉢で、互いが連結したX字状把手をもつ。低隆帯によって胴部に渦巻文を描く。以上の土器のもつ特徴から、曾利新3式古段階に比定される。

牛石遺跡 1号住居址 (第2図)

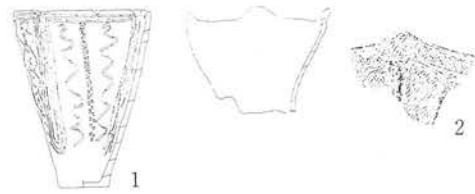
1は口縁部が平縁を呈し、胴部にやや括れをもつ土器である。口唇部直下に沈線による区画がなされ、その上部は無文である。胴部には、沈線によるΠ字状の区画文内に櫛歯状工具による条線文が充填されている。2は破片資料であるが、口縁部を沈線で区画し口唇部に無文帯を有す。逆U字状懸垂文をもち、内部に列点文を施す。懸垂文の両側面に蕨手文を施している。地文に密に施されたハの字文をもつ。以上の特徴から、曾利新3式古段階に比定される。

次郎溝遺跡 第181号土坑 (第3図)

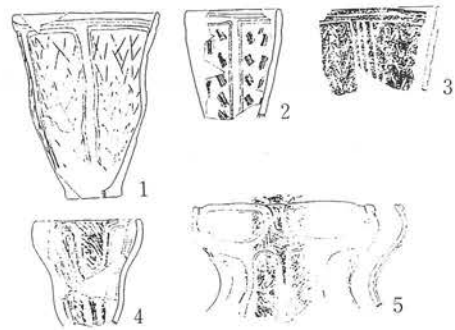
1は底部から直線的に立ち上がる器形を呈し、口縁部は平縁である。楕円文を垂下させる懸垂文で器面を縦位に区画している。その内部に蛇行沈線文を施すなど古相を示す。形の崩れた列点文2行が施されており、以上のことから曾利新3式中段階に比定されよう。

大月遺跡 11号住居址 (第4図)

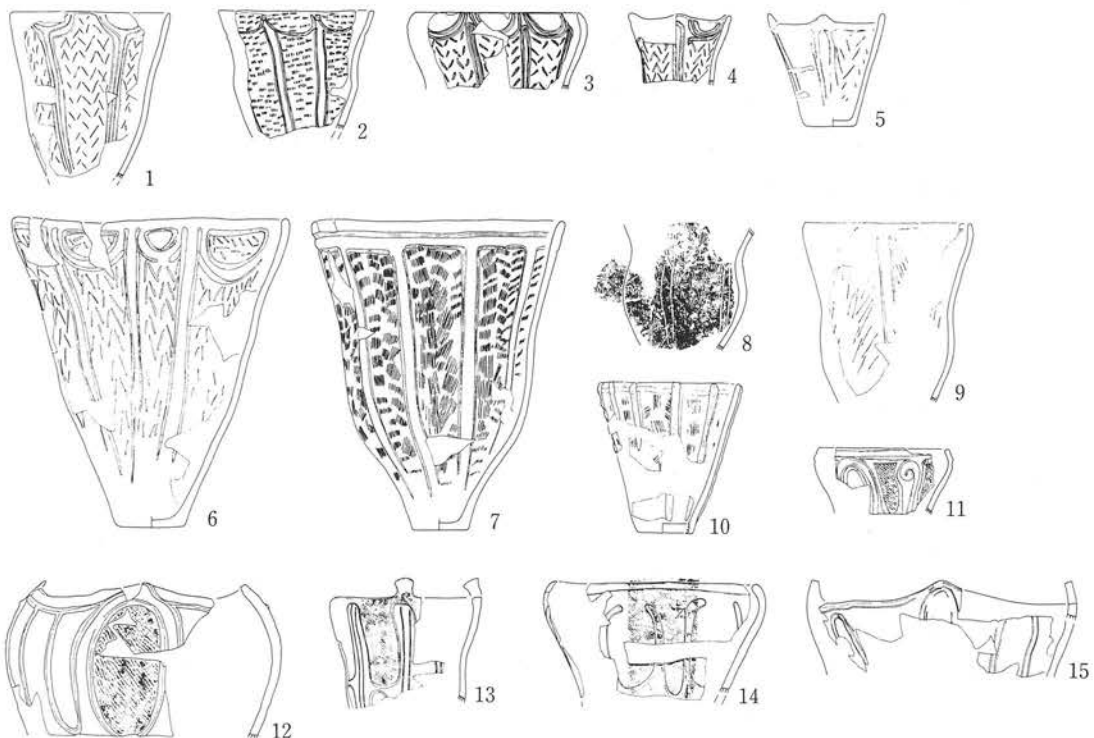
1は胴中位において括れ、口縁部が平縁を呈す。口唇部直下に、微隆起線を横走させている。胴部には、微隆起によってΠ字状に区画した内部にハの字文が施されている。口縁部に渦巻文や楕円文をもたないが、ハ



第3図 次郎溝遺跡 第181号土坑 (1/12)



第4図 大月遺跡 11号住居址 (1/12)



第5図 中谷遺跡 12号住 (1/12)

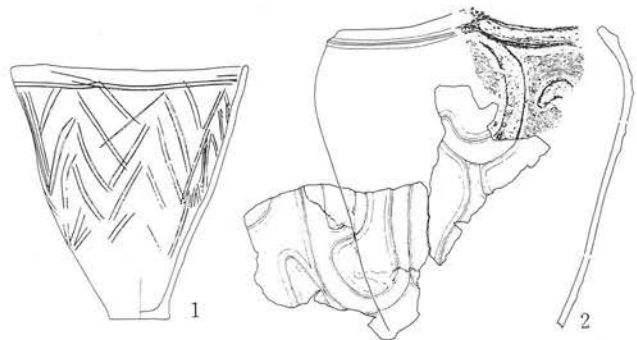
の字文が崩れており、また密に施されていないという特徴があげられる。2は、平縁で胴部に括れをもたない。ハの字文のかわりに楕円状文が施されているが、1と同様、文様構成に崩れを認めることができる。3は破片資料であるが、口唇部直下に沈線による区画をもち、逆U字状の懸垂文をもつ。地文にはハの字文が施されている。以上の土器群の特徴から曾利新3式中段階に比定される。

中谷遺跡 12号住居 (第5図)

1・2・3・4は胴部にわずかな括れをもち、4は波状口縁を呈し、3は口縁部にかけて内湾している。口縁部に弧線文をもち、1のように弧線文の直下から懸垂文を施すものや、2・3・4・6のように弧線文の繋ぎ目から懸垂文を施すものがある。6のように口縁部に楕円文と弧線文をもつなど、古相を示す土器も存在する。5は低部から直線的に立ち上がる器形で、口縁部は4単位の波状を呈している。逆U字状の懸垂文をもち、地文であるハの地文は崩れて施されている。口縁部に弧線文をもつ土器群が出土土器の曾利式土器の大半を占めることより、曾利新3式新段階に比定されよう。

金の尾遺跡 特殊2号土坑 (第6図)

1はいわゆる金の尾段階とされている土器であり、曾利新3式新段階に後続する段階として位置付けられている。口縁部が平縁を呈し、底部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる器形である。口唇部直下を2本の並行沈線によって区画されているだけで、胴部を縦位に区画する区画文や懸垂文は存在しない。地文のハの字文も間延びし



第6図 金の尾遺跡 特殊2号土坑 (1/12)

て施文されているなど、文様構成が崩れていることから曾利新4式に比定される。

以上、遺構単位の資料に対して、曾利式土器編年を基準に編年的位置付けを行った。次に、それら遺構単位で伴出した加曾利E式土器の検討を行いたい。

加曾利E式土器資料の検討

次に、先にあげた遺構単位の一括資料の加曾利E式について、多摩・武蔵野編年における位置付けを行いたい。

曾利新3式古段階

釈迦堂遺跡 S I IV区 S B 78

第1図6は口縁部文様帯をもつ土器である。口縁部文様は低隆帯によって楕円文や渦巻文が描かれているが、隆帯や沈線による口縁部文様帯と胴部文様帯との区画がなされていない。頸部は無文で、胴括れ部に横走する並行沈線文で区画し、沈線文間内に刺突文を施している。区画下には逆U字文と蕨手文が交互に配置され、内部に縄文と蛇行沈線文が施されている。以上の特徴から多摩・武蔵野編年の12c期に比定されよう。

牛石遺跡 1号住居

第2図3は胴部中位にわずかに括れをもち口縁部にかけて内湾し、口縁部が平縁を呈す土器である。口縁部に弧状沈線文が施されており、口唇部直下から弧状沈線文にかけて縄文が施されている。その弧状沈線文に入り組むようにして逆U字状の懸垂文が施され、その内部には縄文が施されている。弧状沈線文と懸垂文

の隙間の無文部に、蕨手状のモチーフが描かれている。4は平縁で底部から直線的に立ち上がると思われ、口縁部は内湾する器形である。3には2のような弧状沈線文は施されておらず、逆U字状の区画内に縄文を施した懸垂文が施されており、蕨手文と交互に配置されている。以上の特徴から、共に多摩・武蔵野編年の12c期に位置付けられる。

曾利新3式中段階

次郎構遺跡第181号土坑

第3図2は口縁部が4単位の波状を呈し、胴中位から口縁部にかけて外反する器形をもつ。口縁部の円形文や楕円文内に縄文を施している。胴部にはII状の区画や沈線のみによる縦位の区画がなされており、縄文部と無文部が交互に配されている。無文部には蕨手文が施されている。この土器は加曾利E式を代表するいわゆる口縁部文様帯をもつキャリパー型の土器で、4単位の波状口縁をもち、口縁部文様帯と胴部文様帯を段や隆帯で明確に区画しないものは新相を示す。このタイプの土器は、この段階で姿を消すようである。多摩・武蔵の編年では12c期に比定される。

大月遺跡11号住居

第4図4は胴部に括れをもち口縁部にかけて内湾し、口縁部は平縁を呈す。胴上半部いっぱいに弧状沈線文が施され、口唇部直下から弧状沈線文の間に縄文が施されている。胴部には、弧線文に入り組むようにして蕨手文や逆U字状文が施されている。多摩・武蔵野編年の12c期に比定される土器である。

曾利新3式新段階

中谷遺跡12号住居

第5図11は胴中位から口縁部にかけて内湾する器形を呈し、口縁部が平縁である。口唇部直下に狭い無文帯による区画がなされ、胴部には、逆U字状の懸垂文や蕨手文が施されている。13は口縁部が平縁を呈し、1単位の把手をもつ。胴部中位に括れをもち、口縁部がわずかに内湾する。胴部中位の括れを境に胴上半部いっぱいに弧状沈線文が描かれ、口唇部直下から弧状沈線文までの間に縄文が施されている。胴下半部には、弧線文に対向するようにして逆U字状の懸垂文が施されており、無文部に2本の並行沈線文が施されている。12は4単位の波状口縁を呈し、胴上半部全体が内湾しながら立ち上がる器形である。口唇部直下に、波状口縁の形状に沿うようにして低隆帯を施し、4単位の波頂部で口唇部まで施すことによって、それぞれの口唇部の無文域を4単位に分断している。胴部においては、波状口縁の波頂部の下に胴上半部いっぱいに低隆帯で楕円文が描かれ、内部に縄文が施されている。その楕円文を囲むように低隆帯が施文されている。波状口縁の波頂部の直下に楕円文を施すことによって、波状口縁の単位と胴部文様である楕円文の単位を合わせるように描かれている。14は胴部中位から外反気味に立ち上がり、口縁部で内湾する器形を呈し平縁である。口唇部直下に沈線で区画をすることによって、口唇部に無文域を作り出している。胴上半部には弧状沈線文が変形したように描かれ、口唇部直下の横走する沈線から弧線文にかけての範囲に縄文が施されている。11・13は以上のことから、多摩・武蔵野編年の12c期に位置付けられる。12・14は13a期に比定される。

曾利新4式（金の尾段階）

金の尾遺跡特殊2号土坑

第6図2土器は波状口縁を持ち、胴部中位にわずかに括れをもつ土器であり、胴部中位から口縁部につ

て内湾している。口唇部直下に、波状口縁に沿うように低隆帯を施すことによって口唇部を区画している。波状口縁の波頂部下から胴上半部いっぱいに、2本の低隆帯で渦巻文を描く。渦巻文の内部は無文である。胴部のモチーフを描いている低隆帯は断面形が三角形であるが、低隆帯の外側の縄文部を低隆帯に沿うようにして擦り消してある。以上の特徴から、多摩・武蔵野編年の13a期に比定される土器であろう。

佐野編年の曾利新3式、新4式及びそれに伴う加曾利E式土器を、多摩・武蔵野編年に対比させ特徴を見つけたが、この時期の加曾利E式土器についてまとめてみたい。

佐野編年の曾利新3式は、ほぼ多摩・武蔵野編年の12c期に比定されるであろう。山梨県内出土の加曾利E3式土器の口縁部文様をもつキャリパー型の土器は曾利新2式の段階でも認められるが、口縁部文様をもたず、胴部上半部に弧状沈線文を描くものは、曾利新3式古段階から出現するようである。口縁部文様帯をもつキャリパー型の土器は口縁部に段をもち、器形上からも口縁部としての区画を意識していたものから、曾利新3式古段階の頃になると口縁部の段が消失し、文様においても明確な区画がなされなくなってきている。山形氏は、「口縁部文様帯が存在し、胴部に縦の磨消縄紋帯が発達する土器群」を曾利新2式に、「伝統的な口縁部文様帯が抜け、胴部上半の大ぶりの波状沈線と下半の逆U字沈線が組み合わされた磨消縄文に、しばしば蕨手縄文が入る土器群」を曾利新3式に、それぞれ並行する(山形1996)としているが、口縁部文様帯をもつ土器群は曾利新3式中段階で姿を消すようである。先述のように、胴上半部に弧状沈線文をもつ土器群は曾利新3式古段階から出現するが、古段階での弧状沈線文は、胴括れ部より高い位置で折り返し描かれることが多いようである⁽⁴⁾。曾利新3式中段階になると、器形上においても胴括れ部から口縁部にかけて内湾するようになり、器形の変化に連動するように、胴上半部いっぱいに弧状沈線文が描かれるものが主体となるようである。曾利新3式新段階になるとキャリパー型の土器は姿を消し、胴上半部いっぱいに弧状沈線文を描く土器が主体となる。また、この段階から多摩・武蔵野編年の13a期の土器が出現する。遺構単位で見ると、出土遺物が加曾利E式土器を主体とするものは、曾利新3式新段階から出現するようである⁽⁵⁾。以上、遺構単位による共伴事例から曾利式編年と加曾利E式編年の対比を行ったが、以上にあげた特徴を基に、山梨県出土の加曾利E式土器について見ていきたい。

山梨県内出土の加曾利E式について(第7図)

ここでは、前項までにあげた加曾利E式土器の特徴から、県内出土の加曾利E式土器の多摩・武蔵野編年における編年的位置付けを行いたい。以降加曾利E3式期に比定される12c期と、加曾利E4式期に比定される13期の土器について見ていきたい。また県内出土の土器を見ていくにあたり、筆者なりに気づいた点も述べていきたい。

12c期

1～4は口縁部文様帯をもつ土器群である。12c期の口縁部は器形においても胴部と区画する段が消え、文様も楕円文等を描くのみで、口縁部文様と胴部文様の境目が不明瞭となっている。胴部文様は、縄文地と無文地が縦に交互に配されているのが主で、1のように全体が縄文地で沈線を垂下させるだけのものもある。副文様には蛇行沈線文や蕨手文が施されている。口縁部文様帯をもつ土器は12c期を通して存在するのではなく、曾利新3式中段階で姿を消すようである。

5～14は胴上半部に弧状沈線文をもつ土器群である。胴上半部に、弧状沈線文と胴下半部逆U字状文の組み合わせによって描かれる土器であるが、その組み合わせによって大きく4つのタイプに分けられるようである。

加曾利E式土器		曾利式土器			
(加曾利E 3) 12	1 2 3 4	5 6 7 15 16	8 9 17	10 11 12 13 14 18 19	(曾利V) 新3式(古)
					(曾利V) 新3式(中)
					(曾利V) 新3式(新)
(加曾利E 4) 13	20 21 22 23 24 25 26 27 28 30 31 32 33	29 34 35 36	37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49	50 51 52	(金の尾段階) 新4式
(加曾利E 4) 13	53				

第7図 加曾利E式・曾利式編年対比 (縮尺不同)

- ① 弧状沈線文に対向し、入り組むように逆U字状文が描かれる一群（8・12）
- ② 弧状沈線文に対向するように逆U字状文が描かれる一群（10・11）
- ③ 弧状沈線文に入り組むようにして逆U字状文が描かれる一群（6・9・13）
- ④ 弧状沈線文をもたず、逆U字状文のみが描かれる一群（7・14）

④の土器群は弧状沈線文をもたないため、この分類に当てはめるのは適当でないかもしれない。しかし、④の土器群は弧状沈線文と逆U字文をもつ土器群のモチーフの組み合わせによって生まれた一つのバリエーションと考えるのが妥当と考え、この分類に加えた。出現時期としては厳密ではないが、①・③・④の土器群に比べ②の土器群の出現が曾利新3式とやや遅れるようである。また胴上半部に描かれる弧状沈線文も、口縁部周辺に描かれるものと胴上半部いっばいに描かれるものの二つがあり、これについても前者が古相、後者が新相を示すという時期差が認められる⁽⁶⁾。15～19は口縁部が波状を呈し、地文は縄文で、微隆起線によって胴上半部に渦巻をモチーフとした文様と、胴下半部には微隆起線による懸垂文が施される。胴括れ部を境に上下二段構成の特徴を持つ土器群である。16の土器が、曾利新3式古段階の曾利式土器と土坑内において伴出していた⁽⁷⁾ため、多摩・武蔵野編年の12c期の中でも古い時期に位置付けられる。18・19は波状口縁を持ち、微隆起線で渦巻のモチーフを描いていることから15・16・17と同系統の土器であると思われるが、磨消縄文が卓越していることから、15・16・17よりも新相を示す土器であろう。18の胴下半部には、12c期に特徴的な蕨手文が描かれている。

13期a期

従来、金の尾段階以降に比定される時期であるが、曾利新3式新段階からその存在が確認されている。13期になると口唇部に無文帯が成立し、磨消縄文が卓越するようになる。文様構成の面では12c期に特徴的な波状沈線文が姿を消し、横に展開していく構成から縦の単位を重視する構成に変化していくという点があげられる。また、胴部に描かれる文様の単位数も4単位に描かれるようになる。13a期になると、12c期の段階では縄文地に微隆起線でモチーフを描く土器群にしか見られなかった微隆起線描出の土器群も多く認められる。この段階においては、まだ4単位文様構成は確立しないようである。

20～25は12c期の②の土器群から派生する土器群であろう。21は胴上半部を横位に展開する無文描出の弧線文が描かれており、12c期の影響を色濃く残す土器群である。24は口縁が4単位の波状を呈し、その波頂間に弧線の山にあたる部分を配置している。文様は胴部に微隆帯をめぐらして、4単位の無文帯を構成している。文様の単位数、また器形においても口縁部が外反気味であることなどから、新しい様相を呈す土器である。20・23はどちらも口縁部がないが、胴括れ部を境にU字状文を向かい合わせるように配置している。22・25は胴上半部の弧線文が変形し、弧線の山にあたる部分が左右共に向かい合い、単位文化している。20～25の土器群は、20・23以外は単位文化の様相を呈すが、その単位数についてはまだ不確定の感が強い。26～30は胴部文様に球状の文様をもつ土器群である。球状の文様をもつ土器群は、13期を通して、胴部文様が胴括れ部を境として上下二段構成をもつものが主に存在する。胴上半部に球状文を描くもの28～30と、括れ部を境に文様を上下に分断せず、一段構成で描く26に分類することができる。26は胴部に緩い括れをもち、4単位の波状口縁を呈す土器である。胴部には、沈線で球状文が胴下半部にまで描かれている。28・29は、縄文部または磨消部を隆起線で縁どるようにして文様が描かれている。30は口唇部直下に微隆起線の区画をもつ。31の土器は口縁部に微隆起線を波状に巡らしている。胴部には逆U字状文が描かれ、内部に縄文を施している。描出法は異なるが、口縁部の波状文や胴上半部にまで及ぶ沈線による逆U字状文など、12c期の影響を色濃く残している。32～36は胴上半部に渦巻文をもつ土器群である。渦巻文をもつ土器群も球状文をもつ土

器群同様に、13期を通して、1段構成をもつものと2段構成をもつものとが存在する。渦巻文をもつ土器群は4単位の波状口縁をもつ土器群がほとんどであり、12c期の微隆起線で渦巻文を描く土器群の影響を残す土器群であろう。32～34の土器は口縁部形態が4単位の波状を呈すにもかかわらず、渦巻文の単位数が6単位であることが多く、この段階では口縁部の波状と胴部文様の単位数が一致しないという特徴を示す。36は胴部に括れをもたない器形で、渦巻文のみを胴部に1段描く土器であるが、この土器においても口縁の波状の単位と胴部文様の単位は一致していないようである。

13b期

37～42になるとU字文がより鋭利になり、V字状を呈すようになる。このU字状文（V字状文）が対向する土器群は文様の単位数が減少傾向にあるものの、12・13期を通して単位数が安定しないという特徴があげられる。口縁部も平縁を呈するものがほとんどのようである。最新相になると構成の崩れが目立つようになり、38のように胴部に1段でV字状文を描くようになる土器群も出現する。東京都国立市南養寺遺跡で、同じ構成を持つ土器が称名寺式と住居内にて伴出しているため、後期に下る可能性もある土器である。43～47の土器は、球状文を単位とした4単位の構成をもつ土器群である。43・46は胴括れ部を境に文様を分けておらず、胴部1段構成をもつ土器である。48・49の土器は胴部の渦巻文が4単位になり、より新相を示すようになる。49の土器は胴部に括れをもたない器形だが、胴下半部から逆U字状の縄文帯が描かれており、2段構成をもつように描かれているが簡略化している。13b期の渦巻文をもつ土器群は、13a期に比べ渦巻の度合いが強くなるという傾向を示すようである。谷井・細田氏が渦巻文をもつ土器群について、新しいもののほど渦巻の度合いが強くなることを指摘している（谷井・細田1995）ことから、48・49においても同様の傾向があるようである。49は37と土坑内において伴出状況にある。50～53は胴部に括れをもたず、口縁部が平縁を呈す土器である。口唇部直下に沈線または低隆帯による区画線をもって無文域を作り、胴部に同じく沈線または低隆帯で懸垂文を垂下させている。そして懸垂文間に縄文地と無文地とを交互に配置させている土器群である。13期成立に特徴的な口唇部直下の無文域、磨消縄文の卓越、胴部文様単位の減少など、主に13期の流れの中に位置付けられる土器群であるが、基本的に他の土器群との交渉があまり認められず、独自の変遷を示す土器群である。また、他の土器群との伴出事例もないため、土器群のもつ特徴から時期的位置付けを行ったことを断っておきたい。50は懸垂文を沈線で描出しているなど、備隆起線で描出するこのタイプの土器群にはあまり見られない土器である。また胴部文様に交互に配されている縄文地と無文地であるが、無文地の方が幅狭に描かれていることなどから、13a期よりも古相を示すようである。以上のことから、ここでは12c期に位置付けた。51～53は、新相を示すもののほど交互に配置させる縄文地と無文地の単位数が減少していくという傾向があるようである（佐野1997）。

まとめ・今後の課題

以上、山梨県内出土の加曽利E式土器を曾利式の編年と対比させて、縄文時代中期終末の土器様相を見てきた。ここでは、現段階において確認し得る成果と問題点について述べていきたい。

多摩・武蔵野編年における12c期は胴上半部に弧状沈線文をもつ土器群の出現する段階として位置付けられているが、その成立時期は曾利新3式古段階成立時とほぼ同じ時期に位置付けられる。また、加曽利E3式を代表する口縁部文様帯をもつ土器群と、胴上半部に弧状沈線文をもつ土器群は、曾利新3式古段階と中段階の古い時期まで共存し、口縁部文様帯を持つ土器群がほぼ曾利新3式中段階で姿を消すようである。胴上半部に弧状沈線文をもつ土器群も多摩・武蔵野編年の12c期では、口縁部周辺に弧状沈線を描く土器群と、

胴上半部いっばいに描く弧状沈線文をもつ土器群が同時期としてのみ記されているが、口縁部に弧状沈線文を描く土器群はより古相を示し、胴上半部いっばいに弧状沈線文を施す土器群より先に姿を消すという特徴があげられる。縄文地文をもち微隆起線で渦巻状のモチーフを描く土器群は、13期において盛行する胴部2段構成をこの段階から持ち合わせており、曾利新3式古段階からの存在を確認することができる⁽⁸⁾。基本的に口縁部文様帯をもつ土器群に、4単位の波状縁をもつものがわずかに見られるものの、12c期の加曾利E式土器群は平縁の土器群がほとんどを占めている。そのような中で、微隆起線でモチーフを描く土器群だけが、4単位の波状口縁と胴部の渦巻のモチーフと、胴部上下2段にモチーフを描くという特徴をもっており、13期の土器群成立を語るうえで非常に重要な土器群であることをうかがい知ることができる。また住居址単位で見ると、従来、金の尾遺跡特殊2号土坑の時期から、山梨県内においても加曾利E式土器が住居址出土遺物のほとんどを占めるようになっていたと言われていたが、加曾利E式土器が出土遺物の主体を占める住居址は、曾利新3式新段階には確実に存在している。以上のことから、曾利新3式中段階から新段階にかけての間に山梨県内の加曾利E式土器の型式学的な変化と、出土状況の変化を認めることができるようである。これは、多摩・武蔵野編年の12c期内の加曾利E式土器における画期の可能性を指摘することになる。しかし、山梨県の出土事例を多摩・武蔵野編年に対比させていることと、曾利式土器と加曾利E式土器の遺構単位における伴出する事例の少なさから正確さに欠けるため、現段階においては変化の可能性を指摘するだけにとどめておきたい。他地域における曾利式土器と加曾利E式土器の様相と見比べ、また県内の資料の増加を待ちつつ、今後、実態の解明に努めたい。

多摩・武蔵野編年の13a期の土器は、曾利新3式新段階には存在が確認されている。12c期の弧状沈線文をもつ土器群のように横位に展開する構成をもつものが13a期になると器面上を縦位に単位文化する傾向が見られる。球状文をもつ土器群と渦巻文をもつ土器群は、13期を通して、それぞれ1段構成と2段構成の2つの段構成をもつものが存在する。後期初頭の称名寺式土器は2段構成のJ字文を特徴として指摘できるが、今後この時期の土器群との関係を明らかにすべきであろう。

13b期の土器群は沈線描出が目立ち、わずかに微隆起線描出の土器群が残る。球状文、渦巻文の土器群は、モチーフの単位が4単位に定着するようになり、称名寺式との単位数における共通点が見受けられる。この段階の渦巻文をもつ土器群は、渦巻の度合いが強くなる傾向も見受けられるようである。また13b期とした土器群の中には、第7図41のように他県において称名寺式土器と伴出するなど、後期に下る可能性のある土器群も認められる。本稿においては称名寺式との関係について触れることができなかったが、山梨県でも称名寺式土器の出土事例が増加傾向にある今、加曾利E4式土器と称名寺式土器の関係の把握も今後の課題となろう。

おわりに

以上、山梨県内出土の縄文中期終末の加曾利E式土器について、曾利式土器との並行関係に触れながら見てきた。遺構の一括資料を扱うにあたり、基本的には報告書の記述に従ったが、遺構単位において層位的な吟味がなされているもの、なされていないものがあるなど、土器の共伴関係の扱いにおいて課題を残したままになってしまった。

加曾利E式については、従来から様々な研究が成されている。しかし、研究者間にある混乱の様相は收拾されておらず、今回対象にするにあたり、非常に注意を要した。また研究を進めるにつれ筆者の浅学を思い知らされるなど、自分の中にも課題を残す結果となってしまった。しかし、今後それら自身における課題

も解決しつつ、縄文時代中期終末の土器様相解明に向けて、さらに研究を続けていきたい。

本稿を作成するにあたり、非常に有益な御教示及び御指摘だけでなく、参考文献・参考資料入手、資料実見に際して便宜を図るなどの御配慮を賜った北巨摩郡埋蔵文化財担当者の方々や、多くの御指導・御協力を賜ったの方々、図版作成にあたり御助力いただいた方々に、末筆ながら、お礼申し上げたいと思う。

註

- (1) 佐野隆は、終焉問題よりも加曽利E式との並行関係を追及することの方に、時間の尺度としての有効性を認めている。(佐野1997)
- (2) 黒尾和久・小林謙一・中山真治氏は、シンポジウム『縄文中期集落の新地平』において縄文時代中期を1期から15期に区分し、加曽利E3式に12a・12b・12c期、加曽利E4式に13a・13b期、称名寺式に14期と15期を、それぞれ設定している。(黒尾・小林・中山1995)
- (3) 佐野隆は、諏訪原遺跡24号住居跡と屋敷添遺跡の出土資料の検証から、口縁部文様において「口縁部文様帯は渦巻文、楕円文の組み合わせが古相を示すと考え。さらに楕円文のみ、あるいは渦巻文と楕円文の退行形態と考えられる弧線文の組み合わせが新相を示す。さらに弧線文のみの口縁部文様帯が最新相を示す」と変遷指標の抽出を行い、それぞれ曾利新3式古段階、中段階、新段階と設定している。(佐野1997)
- (4) 弧状沈線文が口縁部に描かれる土器群は、12c期の口縁部文様帯をもつ土器群と遺構内で伴出することが多く、胴上半部いっばいに弧状沈線文を描く土器群は、それに比べ口縁部文様帯をもつ土器群と伴出する事が少ないという特徴があげられる。それはある時期を境に明確に区分できるものではなく、一概に言えない事例もあり、今後も検討を必要とするのであるが、傾向として指摘することができる。口縁部に弧状沈線文を描く土器は、ある時期から姿を消すことが認められるが、胴上半部いっばいに弧状沈線文を描く土器は、それが姿を消す前から存在が確認されている。弧状沈線文を描く土器群成立時に以上の2つの土器群が存在したが、早い段階に、胴上半部いっばいに弧状沈線文を描く土器群に集約されていったととらえることもできる。この土器群については、まだ今後、慎重に検討する必要がある。
- (5) 大月遺跡2号住居跡の資料がそれにあたる。加曽利E式や曾利式の破片資料から、この段階に位置付けるのが妥当と思われる。
- (6) 黒尾氏は、加曽利E3式を3a・3b・3c式期の3期に細分されている。その3c式期の土器群に対し「逆U字区画、蕨手の懸垂文などの副文様が普遍化した土器」として、弧状沈線文が口縁部周辺に描かれているものと、胴上半部いっばいに描かれているものを、どちらも“加⑨c”の中で扱っている。(黒尾1995)
- (7) 小屋敷遺跡の土坑内で、17の土器と曾利新3式の古段階の土器群が伴出状況にあった。
山梨県北巨摩郡長坂町教育委員会の小宮山隆氏から、小屋敷遺跡の貴重な写真資料の実見に際して便宜を受けた。記してそのご厚意に感謝したい。
- (8) 基本的に、山梨県内出土の縄文地文に微隆起線で渦巻などのモチーフを描く土器群は、いわゆる「梶山タイプ」と呼ばれる土器群と同様のものであると考える。

引用・参考文献

- 伊藤公明 1998 「X字状把手付大型深鉢型土器の展開―八ヶ岳南麓を中心として―」『八ヶ岳考古 平成9年度年報』
北巨摩市町村文化財担当者会
- 加納 実 1994 「加曽利E3・4式土器の系統分析―配列・編年の前提作業として―」『貝塚博物館紀要』第21号 千葉市立貝塚博物館

- 黒尾和久 1995 「縄文中期集落遺跡の基礎的検討（Ⅰ）—時間軸の設定とその考え方について—」『論集宇津木台』
第1集 宇津木台地区考古学研究会
- 黒尾和久・小林謙一・中山真治 1995 「多摩丘陵・武蔵野台地を中心とした縄文時代中期の時期設定」『シンポジウム 縄文中期集落研究の新地平』 縄文中期集落研究グループ・宇津木台地区考古学研究会
- 櫛原功一 1999 「曾利式土器の編年私案」『山梨考古学論集Ⅳ』 山梨県考古学協会
- 佐野 隆 1997 「曾利式土器終末期の編年について—茅ヶ岳山麓における新出資料による編年案—」『八ヶ岳考古平成8年度年報』 北巨摩市町村文化財担当者会
- 末木 健 1981 「曾利式土器」『縄文文化の研究』4 雄山閣
- 末木 健 1988 「曾利式土器様式」『縄文土器大観』3 小学館
- 谷井 彪 他 1982 「縄文中期土器群の再編」『研究紀要』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 谷井 彪・細田 勝 1995 「関東の大木式・東北の加曾利E式土器」『日本考古学』第2号 日本考古学協会
- 谷井 彪・細田 勝 1997 「水窪遺跡の研究—加曾利E式土器の編年と曾利式の関係からみた地域性—」『研究紀要』第13号 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 戸田哲也 1998 「神奈川県における曾利V式期土器様相」『考古論叢 神奈河』第7集 神奈川県考古学会
- 宮崎朝雄 1999 「縄文時代中期後葉土器群の動態について—埼玉県行司免遺跡・古井戸遺跡・将監塚遺跡の比較分析から—」『縄文土器論集—縄文セミナー10周年記念論文集—』 六一書房
- 山形真理子 1996 「曾利式土器の研究（上）（下）—内的展開と外的交渉の歴史—」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』第14・15号 東京大学文学部考古学研究室
- 山本孝司 1992 「加曾利E3-4式と曾利V式について—神奈川県新戸遺跡出土資料を再検討して—」『古代』第94号 早稲田大学考古学会
- 米田明訓 1986 「中期後半土器の諸問題」『柳坪遺跡』
- 大泉村教育委員会 1989 『大和田・大和田第2遺跡』大泉村埋蔵文化財調査報告書7集
- 国立市教育委員会他 1994 『南養寺遺跡—Ⅷ・Ⅸ—』国立市文化財調査報告第35集
- 境川村教育委員会 1989 『一の沢・金山遺跡』境川村埋蔵文化財調査報告書第4輯
- 須玉町教育委員会 1986 『川又南遺跡』須玉町埋蔵文化財調査報告第3集
- 高根町教育委員会他 1996 『次郎構遺跡』
- 高根町教育委員会 1999 『下岡石遺跡』
- 都留市教育委員会 1987 『牛石遺跡』都留市埋蔵文化財調査報告書第11集
- 長坂町教育委員会 1997 『小屋敷遺跡』長坂町埋蔵文化財発掘調査報告書第13集
- 韮崎市教育委員会 1990 『北後田遺跡』
- 韮崎市教育委員会他 1992 『宮ノ前遺跡』
- 韮崎市教育委員会他 1996 『新田遺跡』
- 山梨県教育委員会 1986 『釈迦堂Ⅰ』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第17集
- 山梨県教育委員会 1987 『釈迦堂Ⅱ』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第21集
- 山梨県教育委員会 1987 『金の尾遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第25集
- 山梨県教育委員会 1987 『釈迦堂Ⅲ』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第22集
- 山梨県教育委員会 1987 『郷藏地遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第31集
- 山梨県教育委員会 1996 『中谷遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第116集
- 山梨県教育委員会 1997 『大月遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第139集